満洲からの引揚げの記憶

田中 寛治

◇はじめに

わたくしは1936年8月6日、満洲国奉天（現瀋陽）葵町の満洲航空株式会社（以下満航）社宅で生まれた。父孝一27歳、母次枝25歳の家庭だった。そのころ奉天に置かれていた満航の拠点が、一年後に満洲国の首都新京特別市（現長春）に移った。日本敗戦で、わたくしの故郷—満洲・新京は消えた。1945年8月13日に新京を離れ、朝鮮で暮らし、また、新京に戻り翌年8月13日に博多港に上陸した。その一年が引き揚げの記憶である。

◇男成人は残留死守、婦女子が南に脱出する

新京駅前広場は、手荷物だけの群衆でうずまった。ソ連軍が、早晩、新京が戦場になる想定で、突如、成年男子が関東軍の指揮下に徴用された。同時に、家族婦女子が脱出となり、

「南満州鉄道（満鉄）や関東軍高官の家族優先の列車編成（後日談）」で、わたくしたち満航社員家族が遅れた。鉱物運搬の貨車のガシャガシャガタンの異音で新京駅を離れたのは、終戦の3日前の13日夕刻だった。その婦女子満載の列車は、夜間の大陸を南下し続けた。

◇宣川（せんせん）で「軟禁」になる

朝鮮北部の宣川駅に列車は停車した。朝鮮の人々が案内してくれたところが、日本人の昭和小学校。一夜明けて15日の終戦日になり、そこが第一の「収容所」になる。父方の祖母いと・母方の祖母かね・母次枝・弟妹の淑子・靖男・陽子の七人家族が、板張りの床の教室で掛布団二枚の「場」に雑魚寝した。1日2個のおにぎりしらみと干物に汁、初めて見る虱の発生に大騒ぎをした。街へは一步もでられず、校庭では、朝鮮の人たちが行進をしていた。

◇三か月で、七人家族が四人になる

約三か月の宣川の暮らしだった。現金や母が「茶筒」に入れていた貴金属・父の時計などの全てが「供出（没収?）」になり無一文になった。病にかかっても治療もなく「犠牲」が続出した。わが家で一番早かったのが、髪結師匠で56歳の父方の祖母いと。大阪空襲で焼けだされて新京にたどり着いた直後、「脱出」に巻き込まれた。次に、母方の78歳の祖母かねが、枯れ木が朽ちる様に逝った。そして、8歳の妹が、11月21日に死んだ。

◇ソ連軍占領下の新京（長春）に戻る

父たち満航空社員は、生きていて、宣川の家族救出を試みた。やっと家族が家に戻れた。実は、妹淑子は、新京に北上する列車の中で「水・・・」と言って大いびきをかき、最後を迎えた。重度の黄疸に旅は無理だったのだ。満洲国政府機構をはじめ、会社も全て崩壊した。社宅だけが残った。先攻進駐のソ連兵が「ダワイ（～をよこせ）」で時計を強奪し、婦女に乱暴の話は聞いたが、わたくしの初めて見たソ連軍は、荘重な合唱で、整然と行進をしていた。

◇「無秩序の社会」でも何とか自活する

父は「にわか写真屋」になり、ソ連兵相手にスナップ写真を撮る商売をしていた。子どもたちは、市場になる道路でタバコの売り子をした。赤色刷りの「軍票」がくらしの支えだった。ソ連軍将校宅でメイドになった近所のおばさん、ブローカーとして中国人との商売に飛び歩くおじさんなどなど、日本人も中国人もソ連兵も混然とする日々だった。夜・時々、サーチカ・トーリヤー・サーシャなど、馴染みのソ連兵が黒パンとウオッカを手に訪ねてきた。

◇中国内戦で、弾丸（タマ）の下をくぐる

ソ連軍撤収のしばらく後、新京が、中国内戦の戦場になった。明け方「ポツ・ポツ」という聞きなれない音が社宅の東方から聞こえ始めた。軍の経験がある父が、「あれは小銃の発射だ。ヒュッと鋭い流弾音は発砲元が近い。ヒューンと間のびのする音は遠い」と言って二重窓の内側に布団を積んだ。隙間から見ていると、パラパラッと兵隊が走った。一人が、軍装を脱いで中国服になってふらふらと消えた。銃弾痕が社宅の壁やレンガの塀に残った。

◇めずらしかった解放軍（毛沢東）の気質にふれる

「援助物資？」が空から国府軍向けに投下された。双発の輸送機が頭上を飛んだ時、道路際にいた解放軍の兵士が、小銃をほぼ垂直に構えて一発撃った。輸送機は悠然と飛び去る。わたしには「なんと無茶なことを」と思えた。ある日解放軍兵士三人が「飯を炊かして」と台所に来た。「お礼に？」日本軍の帯剣ベルトを置いていったので、「やさしい兵隊」の印象を深めた（「八路軍の三大紀律八項注意」を後日知る）。解放軍は数日後に、通過していった。

◇約一年間、「勉強の場（学校）」と無縁に過ごす

1946年の春が終るころ、国府軍の統治下で、日本人は、赤いダイヤ印刻印の名札を胸につけた。わが家の商売は「稲荷寿司や」に変わった。父母が朝早く稲荷寿司をつくりタンスの引き出しに並べ街角に出た。日本人・中国人を問わず立ち食いの「朝食」になった。少しの間、小さな「教室」に通った。引き揚げ後の小学校復学で、「留年」をしなかったのも、わたくしは、小学校3年生半ばから4年生の後半までの大事な学業が、「中抜き」になった。

◇引き揚げの流れにのり、長春を離れる

引き揚げの流れは、終戦日からほぼ一年後の夏に広がった。ある朝、わたくしたちの満航社宅の集団が、貨物の駅だった南新京駅で、ガシャガシャガタンと連結音で走り出す無蓋の貨物列車に乗った。奉天から東に分かれて錦洲に着く。そこには引き揚げ者の一時収容所があり、数日滞在し引き揚げ船の順番待ちをした。そして8月6日、わたくしが十歳になる日の午前3時頃、男性の掲げる松明で門を出て、港内引き込み線の「駅」に歩みをすすめた。

◇玄界灘をわたり、ひたすら日本へ向かった

葫蘆島（コロトウは港名）は、満洲引き揚げの日本人のほとんどが踏んだ港である。埠頭に、米軍輸送船（リバタイ）、日本客船、軍艦（駆逐艦）などが停泊していた。行列乗船の直前、父がわたくしの襟に縫い込まれていた日本紙幣に気づき、ビリビリに細かく破り捨てた。リバタイ船の三層区分の船倉は、人々で埋め尽くされていた。わたくしは幼友達の八鳥治久君（2019年没）と、常に甲板にいた。初めて見る海の鳥や飛び魚の姿に魅せられた。

◇体一つの引き揚者に、ふたたびゼロ生活が待っていた

博多港の沖で船が泊り、接岸は、1946年8月13日（引き揚げ証明書）になった。湾内を進むにつれて、船首を海中に沈める巨船や、ブイに係留されてくすんだ色の軍艦など、異様な戦禍が目に入ってきた。一方、陸地の緑が鮮やかで、そばを走る貨物列車が「満洲型」よりずいぶん小さく、まるで、箱庭の玩具に見えだ。埠頭倉庫にはいると、頭から白い粉（DDT）の洗礼を受けた。案内室の地図では、父の大阪・難波や母の東京・豊島は、赤、枠で囲われていた。空襲の焼け跡を示し、引き揚げてきたものの、そこには、なにもなかった。

◇おわりに

満洲国は、日本の中国侵略と植民地政策でつくられ、日本敗戦で消えた「幻の国」だった。父は、陸軍工兵学校で測量学を学び、主として航空写真測量の分野で、関東軍の戦略的な仕事「全満洲の地図製作」を行った。軍令で渡満し、奉天で同窓の後輩（後のわたくしの叔父）宅を訪ね、母と出会った。そして庶民として家族との喜びや悲しみをあやなし、戦争の渦にまきこまれていった。わたくしは、「どんな理屈をつけても、戦争をしてはいけない」と思いつつ、八十八歳の今、十歳のころの断片的な記憶を起こしてみた。ささやかな記憶が、戦争のもたらす事実の「証言」として伝えられることを、切に願っている。

以 上